

「まあ、わたしに？」

驚きがそのまま乗った声で聞き返す。

大きな窓から差し込む春の陽射しは穏やかで、どっしりとした焦げ茶色のテーブルや本棚をやさしく照らしている。すみずみまで本が詰まった本棚が壁一面にあり、部屋の至るところに白い花が活けてある。たつぷりと花びらを蓄えたその花は母の一番のお気に入りだ。

慣れ親しんだ父の書齋、そこにわたしは居た。

向かいのソファに座る父と、それに寄り添う母も神妙な面持ちでうなずいた。

「辺境伯、アルベルト・ヴァルツェン閣下より、縁談の申し入れが来ている」

今さっき言ったばかりの言葉を、父はもう一度繰り返した。

差し出された封筒には王家の紋章を刻んだ封蝋がある。王宮からの正式な書状だ。手紙を開いて読んでみると、確かにそこには父の言葉通りの文言とその理由が簡素に書かれており、わたしはぱちぱちと瞬きを繰り返すことしかできない。あまりに突然で、そして意味が分からなかったのだ。

「……ええ？ 一体どうしてわたしに……」

「分からない。だがそこにある通り、閣下は王からの褒美にお前を願ったそうだ」

「どうして……一度しかお会いしたことがないのに」

書状によると、此度アルベルトさまは王国の悩みの種であった大規模な盗賊団の制圧と解体に成功したその褒美として、わたし——クララ・ミュレ

ン伯爵令嬢、を妻として願ったらしい。

盗賊団は隣国と王国を繋ぐ重要街道に現れるようになり、王都を含む国内への物資輸送、地方への流通、外交使節の往来にまで深刻な影響が出ていた。とくに多くを輸入に頼っている燃料資源への影響は大きく、国民にもかなりの負担を強いてきた。もちろん中央でも解決を試みたが決定打に欠いていたところ、辺境伯自身が指揮を執り、瞬く間に制圧してしまったのはつい最近の話。

——冬が来る前に解決してしまったのよね。おかげで国民全員が燃料不足に怯えずに過ごせたんだもの。今年は雪も多かつたし、本当によかつた。

間違いない彼は王国の救世主で、賞賛の声は王都にも広がっている。王都に住む年頃の令嬢の多くは、その物静かな英雄に恋し「彼のような男性に嫁ぎたい」と、そう口々に言うほどだ。

——今まで散々、獣のように恐ろしい武人でも貴族だとは思えないと言っていたのに、手のひら返しの早いこと。それだけ彼の立場が魅力的なの

でしようけど……。

恋なんて清純な想いではない。

そもそも都会のお嬢様にとって、王国の中で最も雪深く寒い田舎に嫁ぐなんてことは、考えることさえ躊躇うほどの苦痛だ。それなのにお茶会のたびにそんなことを言い合うのは、辺境伯の地位が有益だからに他ならない。王の覚えがめでたい若く有能な貴族との縁が欲しい貴族は、王都に山ほど存在する。巷で蔓延る恋心で覆い隠された生々しい欲望に、思わず眉を寄せた。

「クララ……」

母の心配そうな声に顔を上げる。

——本当にいつまでも仲の良い夫婦だわ。

お互いを支え合うようにして寄り添っている両親は、貴族には珍しい恋愛結婚だ。

そんな両親を見て育ったわたしは、当然好きになった人と結婚がしたかった。貴族に生まれた以上、それが簡単なことではないと分かっている。それでもせめて尊敬ができる方と愛し合えることができたなら、そう願っていた。そしてその想いを、当然この二人は知っている。

わたしはなるべく柔らかく微笑んで見せた。

「大丈夫です。わたしももう19歳ですもの。それにお相手があの辺境伯さまだなんて、これ以上ないことでしょう？」

「でも」

母がひっそりと眉を下げる。そんな母の方を父がさりげなく抱いた。わたしは胸を張るようにして言う。心配しないで、とそんな気持ちを込めて。

「それにわたしは、……ちよつと背が低いこと以外健康です。きっと王家の

期待にも応えられます」

「褒美」と言われて妻を望むことなんて滅多にない。資金の援助だとか、領地の拡張、爵位を上げてもらうことだってできたはず。

それなのにわざわざ妻を望んだ。それは何故かだなんて貴族であれば子どもでも分かること。

——男の子を産めたら良いのだけど。

薄紫色のドレスに包まれた薄い肌を、そつと撫でる。母になる自分なんて想像もできないが、いつかはそうなりたいと思っていたことだ。

今年28になる英雄が独り身では、国にとっても色々不都合なのだろう。

もしかしたら、王に妻を娶るようにと促されたのかもしれない。そうでもなければ、わざわざわたしを求める必要なんてないもの。家格の釣り合いがとれて婚約者もない、健康的な令嬢——だから選ばれた。

それでも。

それでもきつと、辺境伯さまはわたしのことを大切にしてくださる。

去年の春、一度だけ夜会で会った時の振る舞いを思い出す。彼は寡黙で驚くほど無表情だったけれど、とても紳士的な人だった。

……わたしの歩幅に合わせて、ゆっくりと歩いて下さった。大きくて、静かな人。

あの夜の小さな思い出を、わたしは時折思い出しては大切に胸にしまい直している。

——大丈夫よ、きつと優しい方だもの。

窓の外で小鳥が可愛らしく鳴いている。お腹の前で手を重ねて、わたしはにっこりと微笑んだ。

「この結婚、お受けします。元気な跡継ぎを産んでみせますわ」

こうしてわたし、クララ・ミューレンは、王国北方辺境伯アルベルト・ヴ

アルツェンに嫁ぐことが決まったのだった。



同封されていた記入済みの婚約の書類にサインをして送り返した、わずか4日後のこと。

わたしは王宮からの急な呼び出しによって、王城の庭園に居た。辺境伯が到着したから顔合わせを、との命で。

一流の職人の手によって整えられた庭はどこもかしこも美しく、お抱えの庭師にしか咲かせることができない薔薇もあると言う。夢のような場所。できることなら、ゆっくりと見て回りたかった。

丁寧に切り揃えられた低木、風に揺れる花々、薄いピンクの薔薇で作られた見事なアーチ。ガゼボの中に用意されたテーブルに着いていても、その甘

美な香りを感じることができた。

——きれい。近くで見えてみたいけど……さすがに無理ね。

つい庭の方に向いてしまう意識を手に行っているカップに縫い付けると、低く平坦な声が届いた。

「ミューレン嬢」

「はい」

「急なことで驚かせてしまったでしょう。今更こんなことを言うべきではないと思いますが……あなたに謝罪と、精一杯の感謝を」

そう言って静かに目を伏せて頭を下げるのは辺境伯その人だ。

きつちりと服を着込んでいても分かる大きな体を品よく席に納め、わたしに向き合っている。テーブルに並んだ可愛らしいお菓子と華奢なティーセットが何だか子どものおもちゃに見えてしまうほど、彼の体格は良かった。さ

すが、自ら軍を率いて戦っているだけのことはある。

そんな大男が頭を下けているのだから、慌ててしまった。

「まあ、そんな。どうか顔を上げてください……！」

「ですが……」

「お願いですから……ね？」

では……とゆっくりと上げた顔を見て、きゅつと舌の根元が渋くなった。

——ああ、やっぱり。この人が望んだわけではないのね。もしかしたら、領地に恋人や好きな人がいたのかも。かといって、わたしがなんとかできるものでもないのだけど……。

氣遣わしげにこちらを見る目は、冬の空を閉じ込めたような灰色をしている。日陰の中で控えめに輝く銀髪は、どこか静かな雪を連想させた。

この人は狼に似ている。男らしい顔立ちのせいというよりは、彼が纏う高

潔な空気によるものだろう。部下や領民からの信頼も篤いと聞くし、きっと立派なボスに違いない。

そんな人に謝らせてしまうのは、なんとなく嫌だった。申し訳ないような気がするし、何より対等な立場にはないような気がする。夫婦の間に上下関係なんていらぬ。必要なのは信頼と尊敬、そして愛情だ。燃えるような恋の先にある結婚ではないにせよ、わたしはこの人と良い関係を築いていきたい。

「わたしは自分で望んで決めたのです。あなたと……誰よりも仲のいい夫婦になるって」

冬の瞳が軽く見開かれたかと思えば、すぐに伏せられた。困らせてしまっただろうか。でも、せっかく一緒になるのだから、わたしは仲睦まじく暮らしていきたい。それこそ両親たちと同じように。これは譲れない。

辺境伯が静かに紅茶を飲んで、自分の口元を大きな手で覆った。ぐう……と犬が唸るような声が聞こえた気がする。

「……失礼。俺もそう思っています。あなたと穏やかに暮らせたなら、と」

「まあ！ よかった。困らせてしまったかと思いました」

「まさか。あなたが望むことで困ったりはしません」

なんて頼もしい返事だろう。そう言われると困らせてみたくなるのだから、自分に呆れてしまう。

なんにせよ、双方が同じ方向を向いていることが知れて安心した。この思いさえあれば、突然決まった結婚でもうまくやれそうだ。

柔らかな風が頬を撫でる。薔薇の甘い香りがして、胸がずっと軽くなった。

「わたし、向こうで暮らす日が楽しみなんです。それに結婚式も。辺境伯さ

まにもぜひ、色々選んでいただきたくて」

「もちろんです。あなたが望む限りのものを用意します」

「本当に？ 困らせてしまうかも知れませんよ」

「困りませんよ。なんでも言うてください。一生に一度のことなんですから」

言葉を区切って、まっすぐにわたしを見る。笑みのひとつも浮かべない顔なのに、穏やかで優しいと感じるのはどうしてだろう。

「俺はあなたが望むものすべてを差し上げるつもりです」

決意と責任に満ちているのに、薄く熱と甘さを帯びている眼差しに戸惑う。そんな、まるで。

——恋人へのプロポーズみたい。

頬がじわりと熱くなった。絡んだ視線は解けることはなく、ガゼボの中に漂う空気はテーブルの上に並んだお菓子のように甘い。

——違うわ。辺境伯は婚姻の責任感でそうおっしゃってくれただけ。想い人がいるかもしれないのよ。わたしのことが好きだから、なんて失礼な勘違いをしてはだめ……！

厚かましい思い上がりで頭を振りなくなる衝動を、淑女の仮面でなんとか抑え込む。代わりに急に言葉が浮かばなくなって無理矢理アーチの方を見ると、辺境伯が立ち上がって、そっと片手を差し出した。

「少し、歩きませんか」

「え？」

「向こうに薔薇が咲いているでしょう。……少し見ていきたくなりました。もし良かったら、お付き合ひ願えませんか」

低い声が抑揚なく告げる声が嘘だということは、すぐに分かった。

だってどう見ても彼が花に興味があるとは思えなかったし、もし本当に見て行きたいのであればこの顔合わせの後いくらでも時間があるのだ。

——わたしの、ため。あの夜と同じ。

ここに来てからずっと庭園を気にしていたことを見抜かれていた。そう理解した瞬間、胸がきゅんと高鳴った。ちよろい、自分でもそう思うが、手を取らない理由にはならない。顔に笑みが広がっていくのが分かる。そっと片手を差し出した。

「ええ、もちろん。ずっと近くで見たいと思っていました」

重ねた手は驚くほど硬くごつごつとしていて、そして意外なほど暖かかった。



ヴァルツェン領の教会で執り行われた結婚式はつつがなく終わった。

わたしが着た真っ白のドレスは立体的なフリルと繊細なレースがたつぷりとあしらわれ、裾にかけて白い糸で入れられた刺繍が美しかった。大粒のダイヤモンドを惜しみなくあしらった煌びやかなネックレスは、辺境伯からの贈り物だ。

式の数週間前に届いたそれを見た両親は感激し、「きつとクララを大切にしてくれるに違いない」と大層喜んだし、それはその後のお披露目パーティーでも参列者が口々に誉めてくださった。妻への贈り物を惜しまない辺境伯の評価は鰻登りだ。

そして今、わたしは寢室の窓から外を見ていた。

白くなめらかな壁に、さりげない金色の装飾。高い窓枠を隠すようにして垂れているレースのカーテンは春に咲く花のような薄桃色で、朝になればき

つと陽の光を受けて美しく透けるだろう。寒い地域だと言うのにあちこちに活けられた花はどれもきれいに開いていて、丹精込めて育てられたことが分かる。

すべて自分好みに仕立てられた寢室。今は点在する照明によって控えめに照らされていて、どこかしっとりとした独特の雰囲気醸し出していた。

「大丈夫、きつとうまくやれるわ」

侍女たちの手によって磨き上げられた身体は、薄い夜着に包まれている。愛されるために存在しているそれは胸元のリボンだけで留められていて、頼りない。羽織りこそ着ているが、それが何の役に立つだろう。このピンクのリボンが解けたら身体の全てがあらわとなってしまうのに。

張り切ってこれを着せてくれた侍女のことを思う。みんながわたしに期待している。否、わたしが無事に孕むことを期待している。

——指南書はちゃんと、読んできたもの。

大丈夫、後は夫である彼に任せればよいのだ。

天蓋付きのベッドに腰かけて目を閉じる。瞼の裏にはあの日の……一緒に庭園を散歩した夫の姿が浮かんだ。あの春の日差しの中で輝く銀髪、硬い手、そしてどこか緊張した冬の色の目。ふふ、と軽やかな笑みがこぼれた。

「……うまくできますように」

不意に頬を空気が撫でた。釣られて顔を扉の方に向けると、そこにはガウンを羽織っただけの辺境伯が立っていた。

背が高いせいで他の家具が小さく見えてしまう。余計な装飾品や剣を身につけていないから、いつもより少しだけ若く見える。まだ毛先が少し濡れているところを見ると、湯浴みの後すぐに来てくれたことが分かった。

「遅くなってすみません」

「いえ、そんなこと……」

後ろ手で扉を閉めてこっちに向かってくる彼は、立ちあがろうとしたわたしを手で制した。

「疲れたでしょう。大丈夫ですか？」

「少しだけ。……あ、アルベルトさま？」

てっきり隣に来るものだと思っていたから驚いた。わたしの正面に膝をついて、こちらを見上げてくる。忠誠を誓う騎士のようなその仕草は洗練されていて、一枚の美しい絵のようだ。

「——ミューレン嬢」

「……っ、はい」

思わず見入ってしまった。名前を呼ばれて慌てて意識を引き戻すと、まっすぐ目が合う。

すぐそこにある照明のオレンジの光がゆらゆらと揺れている。

その灯りに顔の半分を照らされている大柄な男を、私はソファに座ったまま見下ろしていた。

……なんて綺麗な目なのかしら。

昼間に見た時とも、パーティの煌びやかな灯りの下で見た時とも違う。冬の澄んだ空気をそのまま閉じ込めたような灰色の瞳が、わずかな緊張を帯びてわたしを見ていた。

「あなたに話さなくてはならないことがある」

「まあ……なんでしょうか」

低い声が遠慮がちにそう言うのと、そつと手を取られた。触れた手は大きくて硬くて、乾いていてとても熱い。剣だこ、と言うのだろうか。手のひらもごつごつとしていて、自分とは違う生き物の手みたい。触れてもらえたことが嬉しくて、私もそれを望んでいることを示すように両手で包み込んだ。

「なんでも言うてください。わたしは……わたしは、あ、あなたの妻なんですから」

恥ずかしい。緊張して声が軽く上擦ってしまった。

頬が熱を帯びるのを感じて居た堪れずに目を伏せると、小さく息を吐く音がした。

「……参ったな、そんな風に言われては尚のこと言いにくい」

どうということだろう？ 意味を汲み取れなくて首をかしげると、アルベルトさまは困ったように口を開いた。

「今夜はあなたを抱かない」

「えっ？」

思いもよらない言葉に大きく目を見張る。どうして？ わたしったら、なにか粗相をしてしまったのかしら。そんな困惑と動揺が見てとれたのか、少し慌てた様子で彼は続けた。

「勘違いしないで欲しい。問題があるのは俺の方で……まだ無理なんです」
「そんな」

小さくなる声と共に逸らされる視線が悲しくて、私は思わず身を乗り出した。ぎゅっと手を握り直すと、ふた周り近く大きい手は変わらず熱くて少しだけ安心する。冬色の瞳がかすかに細められた。

「わたしの旦那さまは素敵な方です。大きくてお強くて、誰よりもやさしいの。どうかそんなことをおっしゃらないで」

「クララ……」

名前で呼ばれて胸の内側がくすぐったくなる。

はじめて顔を合わせた時からずっと旦那さまはやさしい。それは常に合わせられる歩幅や送られる手紙、話すときに必ず屈んでくれることから分かっていた。

「……でも、もし」

手に力が入ってしまう。わたしは婚約が決まった時からうつすらと思っていたそれを、思い切って口にした。

「……もし他に好きな方がいるのなら、無理にとは言いません。アルベルトさまのお気持ちが一番大切だから……」

「そんなことはない！」

素早く来た否定は大きく、びくんと肩が跳ねた。

「……すまない、大きな声を出して。でも言わせてください、そんな女性はいません。俺は……」

大きな手が今度はわたしの手を包んでそっと手の甲に唇を押し当てる。恭

しく、丁重に。向けられた眼差しはどこまでも真っ直ぐで、嘘なんてひとつもなかった。

「俺は、あなたがいいんです。初めて会った時からずっと」
「アルベルトさま……」

なんて真摯な人なんだろう。王に命じられてわたしを娶ったというのに、こんなにも心を傾けようとしてくれる。

わたしは自分の頬が柔らかく緩んでいくのを感じながらうなずいた。

「失礼なことを言ってごめんなさい。でも、だったらどうして」
「……それは」

「覚悟ならできています。その……閨のこともちゃんと勉強してきましたし、子どもだって必要でしょう？ 男の子でも女の子でも嬉しいけれど……男の

子が生まれるまで、頑張ります。だからわたし……は、その……できることなら、初夜、を……迎えられたら、と」

「いや、あー……それはとても嬉しい、が」

「では、どうして」

淑女にあるまじき言い分だが、そんなことは言っていられない。いくらその配慮が心地よくとも、わたしはこの人の子を孕まなければならぬのだ。ぐ、と言葉に詰まる彼に首をかしげる。そんなに言い難いことなのだろうか。

静かな部屋でしばらくそうしていると、アルベルトさまは眉を寄せて口を開いた。その目が、座っているわたしのつま先から頭までをなぞるように見る。

「……入らないんだ」

「え？」

冬色の瞳がこちらを見る。そして観念した声で言った。

「――失礼しますね」

そっと肩を抱かれて、わたしは呆気なくその腕の中に囚われた。

♡
♡
♡

「ん……っ、う……」

天蓋付きのベッドの真ん中で、並んで座ったままアルベルトさまの腕に抱かれている。

唇の表面をすり合わせて、吐息を混ぜる。結婚式でした誓いのキスよりずっと熱くて、濡れた吐息がくすぐる度に首の裏がぞくぞくと震えた。肩を抱く腕は逞しくて、力が抜けていくわたしの体をしっかりと支えていてくれた。ぬる……♡ と分厚い舌がわたしの唇の間をすべって、唾液で濡れたところを喰む。何度かそうされると自然と口が開いて、舌同士が触れ合う。ちゅ、ちゅく……♡ 小さく響く音と粘膜が擦れる初めての感覚にうまく息ができない。

「は……♡ あ、ふ……、っ♡ ん、ん……っ」

「——クララ」

「ふ、あ……」

顔が離れるころにはもう息が上がっていて、頬が熱い。間近に見下ろされて恥ずかしいはずなのに、どうしてか目を逸らすことができなかった。

アルベルトさまは優しく目を細めて、ちゅ、と額にキスをした。

「こんなものを、あなたに見せるのは嫌なんですが……」

するりと右手が取られて、そのまま彼の下腹部に運ばれる。ガウンを一枚羽織っただけのそこはすぐに“それ”に触れた。

「っ」

「分かりますか？」

「……っは、い」

お、大きい……っ。え？　どうなの？　これって普通のことなの……？
指先に触れたそれは熱く、びくびくと脈打っている。手を引かずにいると、アルベルトさまはわたしの手のひらをやんわりと押し当てた。

「あ、あの、アルベルトさま……っ」

「まだ完全に勃ったわけではないんですが……」

ええ!? 嘘でしょう……? もうこんな、なのに……?

ガウン越しに感じるそれはすでにずっしりと重く、わたしの手のひらよりずっと大きい。硬くて、熱くて……実物を見たことなんてないが、想像していたものより何倍も大きかった。ここまできてやっと「入らない」その言葉の意味を理解した。

生まれて初めて触れる雄の象徴に、緊張と恥ずかしさ、それから強い興味が一緒になって湧いてくる。本と侍女から聞いた話でしか知らなかったことが現実になって目の前にあるのだから仕方ない。目が離せなくてじっと見つめたまま、すり……♡ と撫で上げると、手の中で熱の塊がびくりと跳ねた。

「ッ……」

「あ、やだ、ごめんなさい……」

「いえ……」

淡く頬を染めたアルベルトさまが、またキスをしてくれる。照れ隠しみたいなその仕草がなんだか可愛らしくて、口元が緩んだ。

「あの、アルベルトさま。その……わたし……」

鼻先が触れそうな距離で見つめあう。ほんのりと熱を帯びた瞳が言葉を促した。

「わたし、アルベルトさまとしたい……です」

「……無理しなくても」

「無理なんて」

してない。そう言いたいの、手のひらに触れる熱の重みに怖気付いて俯いてしまう。

——だって、こんなに大きいものが入るわけがないもの……！

そっと瞳を見上げる。灰色の瞳が熱を帯びて、わたしだけを映していた。絡んだ視線からその熱が流し込まれるように思わず目を逸らすと、ぐっと強く抱き寄せられて——

「きゃ」

「……俺は」

わたしは仰向けになって、アルベルトさまを見上げていた。組み敷かれている、そう思った時にはもう唇が塞がれていた。

「っう……んん……」

「ふ……ッ……」

ちゅ……ちゅ……ぐ♡ 舌が絡んで根元から甘く扱きあげられる。

分厚くて長い舌が口の中を埋め尽くして、隅々まで舐める。ぬるぬると粘膜が擦れて、唾液が流れ込んだでは混ざっていく。息をしようとすればその唾液が流れ込んできて、飲み込むことしかできない。上顎に舌の表面、並んだ歯さえもが彼になぶられてとろけていく。

「ッん、ん——……っ……♡」

「……は、……クララ」

「っふ、あ……、っは、あ……♡」

ぢゅ……♡ 唾液を吸い上げて唇が離れる頃にはもう、頭の芯がぼんやりと惚けていた。

硬くてごつごつした指がやさしく頬を撫でるから、その指を捕まえて頬ずりした。深いキスは気持ちよくて、何より彼とこうして触れ合えることで不思議と安心した。

「何か嫌だったり、痛いことがあればすぐに言ってください。俺を殴っても良いから」

「そんなこと」

あるはずない、という言葉は声になる前に喉の奥に引っ込んだ。

大きな手が胸元のリボンを解いた。プレゼントの包装が開くみたいに寝間着が左右にはだけて、たゆんと丸い乳房があらわになる。メイド以外の人間に見せたことのない場所を晒す恥ずかしさに顔が熱くなった。暖かいはずの

部屋の空気が触れて、乳首がつんと膨らんでしまうのがまたどうしようもなく羞恥を加速させる。

「……ッ」

「大丈夫ですか？」

「だ、……っ大丈夫、です……っ」

こくこくと何度も頷いて先を促す。その間も目はぎゅっと瞑ったままでいた。だって一体どんな顔をしていたらいいの……っ！

「すみません、失礼しますね」

「え、……っあ」

ベッドが軋んで、隣に横になったアルベルトさまに抱かれた。逞しい左腕

の付け根に頭を乗せて並びあう。そしてそのまま胸をやわやわと揉まれた。

「ん……っ」

「……ここに、触れたことはありますか？」

「ない……です……っあ…♡ ん、ん……♡」

感触を確かめるように揉んで、それから肌の表面を撫でていく。触れるか触れないか、その絶妙な加減に首の裏がぞくぞくと震えてたまらない。時々指が乳首を掠めて、びくっ♡ と大袈裟なほど肩が跳ねる。それを嗜めるように肩を抱かれて、逃げ場を失ったわたしは、次いつ来るか分からないその刺激に身構えてしまう。じっとアルベルトさまの手を見て、柔らかな胸の先にある乳首を意識する。

さわ、さわ……♡ すり♡ すり♡

する……♡ すり……♡

来る、来る……っ♡

指先が乳輪に触れて、

「ッあ♡」

きゅ♡ と乳首を軽く摘まれて声が溢れた。

あまりに甘い自分の声に驚いているうちに、乳首の先を乾いた指の腹で撫でまわされる。表面だけをやさしく、すりすり……♡ 撫でて、ぴん♡ と弾いた。今まで気にしたことなかった場所が徐々に敏感になって、くすぐったさが徐々に心地よさにすり替わっていく。

「あ……♡ あ……ッ♡ っふ、う……♡」

「クララ、こっちを見て」

「ん、あ……っ♡ んん……ッ♡」

深く口付けられて息ができない。にゆるにゆると舌が絡んできて、覚えたばかりの甘い幸福感がまた舌に滲んでいく。

息つぎのためにわずかな隙間ができると、アルベルトさまの熱い吐息が漏れてくすぐつたい。ざらついた舌に薄甘い唾液の味。粘膜から他人の体温を感じることに夢中になっていると、かり♡ と爪が乳首を引っ掻いた。

「ッ!♡ う♡ ん、ん……ッ♡」

「は……、ッ」

かりかり♡ かり♡ くりくり……♡

こしゅ♡ こしゅ♡ すりすり……かりかり♡

乳首の先っぽを短く切り揃えられた爪が、何度も引つ搔いて来る。

堪らなくなつて背中に力が入ると、今度は指でやさしく撫でて抜く。硬くなった乳首をそうやってやさしく虐めて甘やかされながら、ぐちゅ……♡と音を立てて舌を吸られて、足の先までぴん……♡と伸びた。

どうしよう、どうしよう……♡ 腰がふわふわす、る……♡

太く硬い腕に抱かれたまま、腰だけを浮かせて悶える。触つて♡ とでも言うようにゆら、ゆら♡ 腰が揺れてしまう。

「——……は、……辛いですか？ 腰が揺れてる」

「ッあ♡ あ♡ つら、くないです……っん♡ ん……ッ♡」

「本当に？」

「あッ♡」

彼の手が下半身へと伸びて、するりと内腿を撫でる。

「あ、そんなところ……っ……♡」

「……大丈夫、そのまま力を抜いていてください」

っ、と指が内腿をなぞる。

侍女以外の他人に触れたことのないそこは自分が思っていた以上に敏感で、びくりと膝が動いた。大袈裟な反応が恥ずかしくて目を閉じると、尻にやさしくキスをしてくれた。薄い唇から漏れる吐息がかすかに濡れていて安心する。

「っふぁ……♡」

「濡れてますね。よかった」

ぬるん……♡ と指が滑って腰が震えた。

本によると“ここ”にそれが入るらしい。一体どうやって……と浮かんだ疑問はすぐにその刺激によってかき消された。

「ッあ!♡」

アルベルトさまの指がそこを撫でるたびに、♡ と頭が痺れる。
下から上に何度も撫でられてじっとしていられない。腰をよじって足を閉じようとすると、やんわりと手でそれを制された。

「足、閉じないで。……ここ、痛くないですか？」

「い……ったくな、い……っ♡ あ♡ ああ……ッ♡ ん、んん——…っ♡」

くちゅ……♡ と音を立てて割れ目をなぞり上げた指が、膨らんだ肉芽をくるくる♡ 撫でてくる。自分が溢れさせた蜜のおかげで痛みこそないが、代わりに感じたこともないほど強い刺激が突き抜ける。びくびく♡ 腰が跳ねるのも止められない。太ももに力が入って、そこにある彼の大きな手を何度も挟み込んでしまう。くすぐったいような、痺れるような、今まで感じたことのない感覚。

あ♡ あ♡ なに♡ こわい♡♡ なにこれ……ッ♡
わたしはアルベルトさまのガウンをきつく握って目を閉じた。こうしていいないとこの刺激の波に拐われて、戻ってこれなくなりそうだった。

「…………クララ」

「っあ、るべるとさま……ッんう、う♡」

「ふ……ああ、本当に初めて、なんですわね。ここが何かも分からない？」

「わかつ、分からない……ッ♡ あ♡ んあ、あ……ッ♡」

ちゅ、と目尻にキスをされて目を開ける。

潤んだ視界に映ったのは何か強い欲求を抑え込んで堪えているような、そんな彼の表情だった。熱い吐息が肌に触れてぞくぞくする。手つきはどこまでも優しいのに、自分に向けられている欲求は重く鋭くて、胸の奥が酷く満たされた。

「……よかった。でもそれなら尚のこと、悦くしておかないと。俺に触れると気持ちいい場所だって覚えてもらいたいから」

そう言うとき長い指が肉芽を挟んで、ぐにぐに……♡と揉む。じわりと快感が滲んで、吐く息が震えた。

「あ、あ……♡」

「分かりますか？　ここ、……クリトリスが膨らんでる。こうするとほら、硬くなってもっと気持ちよくなりますから」

そう教えられてはじめて、わたしはそこが“クリトリス”という器官なのだと言った。ぼつてりと膨らんでいることがなんとなくの感覚で分かる。それを指で挟んで、ゆさゆさ♡ 揺らされると息が甘く震えてしまう。芯から甘く捏ねられているみたい……♡　これが“気持ちいい”ってことなの……？

「あ♡ あん……♡ きもち、いい……？♡」

「……ええ。腹の奥が熱くなってきませんか？」

「んあぁ……♡ は、い……♡ おなかの、奥が……じん、じんしま、す

……♡ あ♡ ん♡ う♡」

言い終わるのとはほとんど同時にキスをされる。今度は舌は絡めずに表面を擦り合わせて、上がった息を混ぜ合わせた。アルベルトさまの息は熱くて、ほんのりとワインの匂いがする。その間もずっと、クリトリスをなぶられている。指でくるくると撫で回したり、持ち上げるようにして扱いたり。小さなそれを飽きることなく愛でられて、頭の芯が熱でとろけそう。言うことを聞かなくなりつつある腰をくねらせて、刺激を追いかける。

「覚えてください。ここを俺に触られると気持ちいい、と」

「あ♡ ツ♡ あ♡ は、いい♡ きもち、いい♡ これ、きもちいいです……♡」

「……愛らしい。本当にあなたは可愛い人ですね。素直で、無垢で……」

不自然に途切れた言葉を聞き返す余裕なんてない。ぬるぬる滑る指が与えてくれる甘やかな刺激に思考と恥じらいが囚われて溶けていく。

「もっと、もっとこのまま悦くなつて」

「ああ……♡ ん、ん……♡ あ♡ で、も……これでは……♡」

このままだ気持ちよくされていて、先に進めない。そう言いたかったのに最後まで言い切れなかった。じんじんと熱くなったそこから感じる快感に流されてしまう。

「あなたが気持ちよくなって、濡らして……そうしてからでないと、無理です。絶対には傷ついたり、痛い思いをさせたくないんです」

「っふ、う……♡♡ あ♡♡ あ、あ♡♡ そんな……♡」

指南書にはそんなこと書いていなかった。ただ心を通わせたなら、としか書かれておらず、それならばもう十分だと思うのに。

ゆさ、ゆさ♡　ぎゅ……♡　すり♡
ぬりゅ♡　ぬぢゅ♡　くち♡　ぬぢぬぢ……♡

「あっ♡　ああ……っう、んん……ッ♡　ん——……ッ♡♡」
「そう、上手。息を止めないで……」

ちゅ、と濡れた音を立てて唇にキスをされる。そうやって促されて口を開くと、また甘えた声がこぼれた。

「は……っ♡　あ♡　ッああ……♡」

「大丈夫ですか？　体は楽にして……そう、俺に任せていてください」

長くて硬い指が膨らんだクリトリスを挟んで上下に扱いた。自分から溢れた蜜がぬるぬると指をすべらせているおかげで痛みや不快感はこれっぽっち

もなく、ただただ鋭く痺れるような快感が滲んだ。最初はくすぐったいばかりだったのに、今ではもう気持ちよくて仕方がない。むずむずするような、身を振りたいくなるような、じっとしていられない感覚が体を支配する。

なにこれ……♡ 腰が勝手に浮いちゃう……♡

ちゅこちゅこ♡ ぢゅく♡ ぢゅこぢゅこ♡

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ にちにちにち……♡

「ふ……っ♡ ツあ♡ ああ♡ ある、べるとさま……♡ ツ♡ あ♡
あ♡」

今まで感じたことのない刺激に下半身が囚われるのが怖くて、すぐそこにいるアルベルトさまを見上げる。

冬の空のような瞳が、熱を帯びて私を見ている。肌を晒して足を開いて、

ぐっしょりと濡れたそこをこの人に見せていることを実感して頬が熱くなった。

「大丈夫、怖がることはないから。そのまま……気持ちいことにだけ集中して」

低い声にひどく安心する。その間もずっと指はクリトリスをちゅこちゅこ♡扱いて、時々思い出したように弾く。快感を得るためにある器官はそれを悦んで、ぴったりと閉じている秘裂から絶えることなく熱い愛液を垂らした。

あ♡ あ♡ なんか来ちゃ……う♡ くる♡

ぶるりと体が震えて全身が強張る。 “ なにか ” が込み上げてくる未知の感覚に私はきつく目を閉じた。

「ッうう、う……っ！♡」

アルベルト様が短く息を吐く音がして、それからぎゅっと抱き寄せられた。太い腕にそうされると私は少しも身動きが取れない。触れている肌が熱くて嬉しくて夢中で縋ると、クリトリスの裏側を小刻みに何度も、ぬりゅぬりゅこすり上げられた♡

「あッ♡ あ♡ っや、あ……っ♡」

「クララ、力を抜いて」

「むり、です……っあ♡ あ♡ ひ、ッ♡ うう、う——っ♡」

一気に与えられた刺激を受け止めきれず、それが決壊したと同時に、びくん♡ びくびく♡ と腰が大きく跳ねて、頭が真っ白になった。指の先はまだ気持ちいい♡ 感覚が抜けていつても何も考えられない。息をするのすら難しくて喘いでしまう。なに♡ 今の、なんなの♡

「…………ッ」

「ふ♡ あ♡ あ……？♡」

わけも分からないまま、ぱちぱちと瞬きを繰り返していると旦那さまが目尻に唇を押し当ててきた。

「よかった、ちゃんとイけましたね」

「い、く……？」

「ええ。ほら……ここももう、こんなに」

力が抜けてしまった足の間からアルベルトさまの手がずるりと引き上げて、目の前に来た。大きな手は濡れていて、長い指にはべつとりと蜜がまとわりついている。それは揃えていた指を開くと、とろお……♡ と垂れてしまう

ほど多く、わたしがどれほど感じていたかの証明になり得ると言うことは、言われなくても分かってしまった。

「あ……♡ や、だ……ごめんなさい……♡」

「謝ることなんて何も。ちゃんと気持ちよくなれて良かった、偉いですね」
「うう……」

まるで子どもをあやすみたいに言うから、恥ずかしさで目が開けられない。そんなわたしを静かに笑う音がして、瞼にキスが落ちた。触れた唇は熱く、何かを押さえ込むような息遣いを感じる。

「今夜最後までは無理、ですが……」

そう言ってそっと身体を離れたアルベルト様は、だらしなく開いたままに

なっているわたしの足の間に膝立ちになった。

ガウンを脱ぐと鍛えげられた身体があらわとなり、思わず息を呑む。

分厚い胸板に均等に割れた腹筋、ずっとわたしを抱いていた腕は想像していたよりずっと太く逞しい。頼りない灯りに照らされたその身体は彫刻や鎧のよう。鍛錬や戦いの中で作ったであろう細かな傷跡がまた不思議と色つばかった。

「え、あ……、うそ……っ」

べちん♡ と音を立てて腹に寄せられたそれに大きく目を見張る。

アルベルト様のそれは思っていたものより更に大きく、太い。血管が浮き出た竿はびくびく……♡ 脈打ち、ぼつてりと腫れたように膨らんだ龟头はうつすらと濡れている。これが自分の中に入る想像が全くできない。唾液を飲んで、ごくりと喉が鳴った。

——え？ え……？ こんな、本と全然違う……！

指南書ではぼんやりとぼかされていたせいで何も知らなかった。形も、熱も、重みも、全くの未知。

それなのに臍の下あたりがぎゅうぎゅうと締まるように疼いて堪らない。知識がなくとも本能はこれを切実に欲しがっている。

「分かってもらえましたか？」

「は、い……」

「ただでさえこう、なのに、俺たちの体格差を考えると……」

なるほど、だから今夜は抱かないと、そう言ったのかと合点がいく。だって、今こうして見ているだけで……。

「ここまで、入っちゃうんですもの……ね？」

お臍の少し下を、ちゃんと指で示す。すると、アルベルト様が息を呑むのと同時に、びくん♡と肉棹が跳ねた。

「……………ッ……、クララ」

「え……？　なんでしよう」

「疲れているでしょうし、もう寝かせようと思っていたのに」
「ひゃんっ」

投げ出したままになっていた両足を抱えられて、恥ずかしさに間抜けな声が溢れた。

膝の裏を手のひらで支えて固定されると、もうどうすることも出来ない。

とろけきった秘部を晒す恥ずかしさに頬が熱くなるのを感じた瞬間、ずるん♡と熱で擦り上げられて、また声が震えた。

「あっ♡ あ♡ や♡ ツあ、なに……っ♡」

「これ？ 分かっているでしょう？ ちんぽ、ですよ。俺の」

「ち、ちが……っ♡ あ♡ あん、ッん♡」

「違いますよ。ほら……あなたの、クララの夫のちんぽでしょう？ 見えますか？」

そう言って何度も、ずりずり♡ ずりゆ♡ にちゆにちゆ♡ いやらしい音を立ててクリトリスを擦り上げられる。

指とはまた違う、もっと重くて熱いものにそうされる刺激に頭が甘く痺れて溶けていく。

今までの優しい、紳士的な彼はどこに行ってしまったのか。意地悪い言葉を吐く唇を淡い笑みに歪めて、硬くなったままにクリトリスを虐めてくる。

ずち、ずち♡ にちゅ♡ にちゅにちゅ♡
ずりゅん♡ ずりずりずり♡♡

「おッ♡ ああッ♡ 待つ、て♡ ん、ッ♡ は、ああ……っ♡」

「待ちますよ。大丈夫、クララがこれを受け入れられるようになるまで、待ちます。ゆっくり二人で……身体を慣らしていきましょね」

「そうじゃ、な、……ッあ♡ あ、ッん♡ あ♡ うう——ッ♡♡」

足を抱えたアルベルト様が、半ばのし掛かるみたいにして覆い被さる——
所謂正常位で腰を打ち付けられると、ぱんっ♡ ぱんっ♡ と肌がぶつかる音と、ぬちゅぬちゅ♡ と卑猥な音がして、本当に体を重ねているような気になってしまう。

イッたばかりの身体は敏感で、ずっしりと重い肉棹が行き来するだけでどうにかなりそう♡

開脚することで開いてしまったそこに太い竿がねつとりと絡み、クリトリ
スを巻き込んで動く。

ぐりゅん♡ ずりゅ♡ ぐちぐち♡
にちゅにちゅ♡ ぐり♡ ぐりゅ♡♡

「ひ♡ ツあ♡ あッ♡ だ、め♡ これ、だめ、ツ♡ いく、いっちや、
う♡」

「……ふ。もう、ですか？ さっき覚えたばかりなのに、もうクリトリス気
持ちいい？」

「きもち♡ きもち、ッです♡ あ♡ んんう……ッ♡」

どうしてだかわからないが、薄く笑われて恥ずかしさに感度が上がってい
く。

じくじくと熱くなったクリトリスがアルベルト様に捏ねられるたびに、びく♡ びく♡ 腰が跳ねて浮いたつま先まで力が入る。

きもちいい♡ きもちいい♡ あたま、溶けちゃう……ッ♡

溢れて止まらない愛液がお尻の方まで垂れていることが分かるし、はしらないことを口に行っている自覚もある。それでも覚えたての快感を貪るのをやめられない……♡

じりじりと快感が迫り上がってきて限界がちらつく。息が浅くなって苦しい。さっき覚えたての絶頂の予感に指先に力が入った。

「ッああ♡ いく、も、う、むりです……っ♡ や、あ♡ あるべ、るとさまあ……っ♡」

「——ッ、いいですよ。ほら、俺ので気持ちよくなって、イって」

「ッふ、ああッ♡♡」

ぐりぐりぐり♡ 亀頭がクリトリスを甘く強く押しつぶす♡
大きく涙目を見張って身体が強張った直後、びくッ♡ びくびくッ♡ 大
きく痙攣して人生で二度目の絶頂を経験した。

「~~~~~~~~ッ♡♡」

「クララ、気持ちいい？」

「あ♡ ああ……♡」

甘い蜜に浸したような低音に首の裏がぞくり♡ と震える。
こくこくとうなずくことしか出来なくて、ぼやける視界でアルベルト様を
見上げると、すぐに抱きしめられた。

「クララ……、あの夜からずっと、俺は……」

「え……？」

耳元で聞こえた声は感極まったもので、熱く、甘く濡れている。

大きな身体に覆い被さられているせいで顔を見ることは出来ない。ただ重なった肌は熱く、触れているところから混ざり合ってしまったそう。

——ずっと……？　ずっと、どうしたのかしら。

その疑問を口にする前に、ごぢゅッ♡　と強く腰を打ち付けられて思考は瞬く間に快楽に散った。

「んあぁッ♡　あッ♡　あ♡　お♡　ッうん……ッ！♡」
「は……、可愛い。やっど、……ッ」

ずちゅずちゅ♡　ごりゅ♡
ずりずり♡　ずりゅん♡　ぬちゅぬちゅ♡♡

うわ言みたく何度も繰り返す言葉の意味を理解することなんてできない。
身動きが取れないほどがっしりと抱き込まれて、ひたすら腰を打ち付けら
れる擬似行為に喘ぐことしかできない……♡

熱いおちんぽがぬるぬるの秘部をすべって、硬いクリトリスを熱心に口説
く。おなかの奥の方はずっと疼いていて、苦しいのにもっと欲しくて堪らな
い。

「んあ、あ♡ あっ♡ すご、い♡ あ♡ これ、だめ♡ おなか、くるし
い……ッ♡」

「苦しい？ 痛いですか？ それとも」

大きな手が頭を撫でて、愛おしそうに見つめられる。灰色の瞳が熱く潤ん
で、ひどく色っぽい。

ぐ♡ と腰を深く押し付けては、そのまま吐息混じりの声でアルベルト様

が訊いた。

「ちんぽ、欲しくて苦しい？」

どくどく……♡ 脈打つおちんぽがお臍の下まで届いている……♡
今まで意識もしたことがなかった子宮が正解を当てられて鈍く疼く。なんて
答えたらしいのか分からなくて、ただ彼の言うことが正しいことを示したく
て、うなずいた。

「ほ、しい……っ♡ お、ちんぽ……欲しい、です……♡ ツああ♡♡」

「——……ッ♡」

「んん——……ッ♡」

次の瞬間、深く唇を重ねて、そのまま激しく突き上げられた♡

入っていない。いないのに、わたしの奥の方まで満たさんとする動きで腰を打ち付けてくる。

シーツまで伝う愛液が恥ずかしい音を立てて散るのが分かった。

ぐちぐち♡ ずりゅん♡

ばちゅ♡ ずちゅ♡ ずちゅずちゅ♡♡

「んお♡ は、ああ……♡ お♡ ぐ♡ んぐう——♡♡」

だめ♡ だめ♡ これむり♡ 変な声でちゃ、う♡♡

口の深いところまで分厚い舌が掘じ込まれて息ができない。そのせいで、唇の隙間から淑女とは思えない声が溢れてしまう。

ぬりゅぬりゅ♡ れろ……♡ 舌を絡めて唾液を吸って貪りながら熱っぽい律動に追い詰められていく。しゅわしゅわと音を立てて思考が溶け出して

いって、もう何も考えられない。

大きな身体に目一杯しがみついて込み上げてくる絶頂感に身を委ねた。

びくびくび、くッ♡♡♡ ぶる……っ♡ 不規則に身体が跳ねて、震えて、上から優しく押さえつけられている足腰が、がく、がく♡ と言うことを聞かない。視界が涙で霞んで、全身を撚る快感の波に飲み込まれていく。

「へ、……っああ……♡ お♡ んん——……ッ♡♡」

「——……ッ、クララ……♡」

わたしが果てたと同時に唇が離れて、額を重ねた距離でアルベルト様が低くうめいた。

びゅるるるッ♡ どくどく♡ ぶびゅッ♡ びゆくッ♡♡ 鈍い水音と振動が伝わってきた後すぐに熱を感じた。

「あ……っ？♡ あ……♡ あっ、い……♡」

勢いよく吐き出された熱がお腹の上に広がっている。

それに構うことなくさらに深く抱きしめてくるものだから、ぐちゅ……♡と動くたびに音が鳴る。

覆い被さっている硬い身体は熱く、すぐそこに感じる息遣いからは雄の気配を色濃く感じた。

「クララ……」

「ん……ッ♡」

掠れた低音に呼ばれてすぐ、深くキスをされる。

舌を絡め合う卑猥なものではなく、お互いの存在を慈しみ合うようなそんなキスだった。

何度かそれを繰り返しているうちに、瞼が重くなってくる。早朝から結婚式にパーティをこなし、そして初夜を迎えたのだから無理はない。

「大丈夫、このまま眠ってください」

「でも……」

そんなわけにはいかないと思うのに、身体はどんどん重く沈んでいく。

そんなわたしを見透かしたアルベルト様はぎゅっと抱きしめて、そして頭を撫でてくれた。ふわふわと指先まで浮いてしまうような幸福感と、抗いたい眠気が一気に襲ってくる。

「おやすみなさい、クララ。……また“俺を受け入れてくれてありがとう”」

額に触れた唇がそのまま囁く。

——また？ 受け入れる……？ 一体なんのことかしら……。ああ、だめ、もう……。

いくつも疑問が浮かぶのに意識がついてこない。太く逞しい腕の中で、わたしはとうとう意識を手放した。

クララと出会ったのは一年前の春、王宮が主催する春の祝宴だった。

厳しく長い冬を無事に越え、春の訪れを祝う夜会は建国以来必ず開かれる。会場はもちろん、庭園までもが色とりどりの花で飾られる夜会には王都中の貴族が招かれ、出会いを求める若い貴族たちで賑わうことが常となっている。格式張ったものではないが、王宮主催である以上妙な輩が紛れ込むことはない。要らぬ心配をせずに交流できる良い機会なのだろう。

——まあ、俺には関係ないことだが。

王と王妃への挨拶を終え、隅の柱に背を預けてようやく一息吐く。広間は着飾った男女が溢れ、談笑や楽器隊が奏でる音楽で賑わっていた。都会の眩い世界を目の当たりにして、肩が重くなるような気がした。男どもが詰め込まれたむさ苦しい訓練所が、妙に恋しい。

「……まあ、珍しい」

「お話で聞いたより……ずっと大きくていらっしやるのね」

少し離れたところから話し声が聞こえた。気付かれないように一瞬目をやると、美しく着飾ったどこかのご令嬢方が三人、こちらをチラチラ見ながら囁き合っている。扇で口元を隠していたところで丸聞こえだ。いや、わざとそうしているのかもしれない。

——心配しなくても、俺から近付くことなどないのに。

自分の容姿や態度が異性に全く受けないことは自覚している。しかしそれ
で思い悩んだことなど一度もなかった。貴族、それも辺境の地を任されたもの
にとって婚姻とはその地を守るために必要なものであって、愛し慈しみあう
ためのものではないのだ。家同士の利益、あるいは国益になるものと縁を繋
げたなら上々、跡継ぎが難しいようならどこかから養子を貰えばいい。貴族
の結婚とはどこもそういうものだ。

「近寄りがたい雰囲気をお持ちですわね」

「武勇に優れたお方なんでしょう？ それなのにご結婚の噂はまだ……」

「そうですわよね。あなた、いかが？ とてもご立派な方でしてよ」

「どなたかにとつてはこの上ないご縁でしょうけど……わたくしには少々難しいですわ」

よほどここに俺がいることが気に食わないらしい。

くすくすと笑いを交えた声には、明らかな恐怖と嫌悪を感じる。まるでこの会場に入り込んだ獣を警戒するような、異物を見る目と声。もつとも、ほとんどの男が燕尾服を身に纏う中、徽章やら勲章を付けた濃紺の軍服を着る自分はある種「異物」ではあるが。

——王命でなければ、俺だってわざわざ時間をかけて王都まで来たりしない。

貴族らしい言い回しの中に包まれた言葉の意味に内心ため息を吐く。

——それでも辺境伯の妻の地位は惜しいか。

視線を遠く、広間の中央を照らすシャンデリアに固定しながら思う。

彼女たちも結局は自分と同じだ。家と国のために望まない婚姻を結ばざるを得ない。年若い令嬢にとってそれがどんなに苦痛なことなのかは、流石に理解できる。誰だって少しでも見目がよく、優しい男と暮らしたいだろう。子を望むのであれば尚更。そう思えばこの不愉快なおしゃべりなど可愛いものだ。鬱陶しいことに変わりはないが。

「やだ……ふふ、そんな勿体無いことを言っではいけませんわ」

「でも……みなさんそうでしょう？ ああの田舎で、鬼のような獣と……だなんて」

「きつとたくさんの子宝に恵まれるのでしょうね」

止めるものがない陰口は過激になっていく。この場を離れることであれ

に反応したと思われるのも癪だが、いい加減聞くに耐えない。品のない女は苦手だ。

気取られないように息を吐いて一歩踏み出そうとしたその時、穏やかな春の風のような声が俺と令嬢たちの間を通った。

「まあ、楽しそうなお話をしていらっしやるのね。わたしもお聞きしてみたいわ、混ぜていたただいても？」

薄桃色のドレスを身に纏った姿勢のいい小柄な令嬢が、柔和な笑みでそこに現れた。